津和野町埋蔵文化財報告書第４集

－ NTTドコモ「津和野中座」基地局新設工事に伴う発掘調査報告書 －

陶晴賢本陣跡

２００７年３月

島根県津和野町教育委員会

津和野町埋蔵文化財報告書第４集

― NTTドコモ「津和野中座」基地局新設工事に伴う発掘調査報告書 ―

陶晴賢本陣跡

２００７年３月

島根県津和野町教育委員会

例　　言

1．本書は、平成18年度において、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国の委託を受け実施した「津和野中座」基地局新設工事予定地内「陶晴賢本陣跡」の発掘調査報告書である。

2．調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	島根県教育委員会文化財課		
	広島県立美術館学芸課長		村上　勇
	梅光学院大学教授		渡辺　一雄
	津和野町文化財保護審議会委員		松島　弘
事務局	津和野町教育委員会	教育長	斎藤　数弘
		教育次長	廣石　修
		文化財係	米本　潔
調査員	津和野町教育委員会文化財係長		中井　將胤
		文化財係	宮田　健一
調査補助員	永田　茂美　　椋木　牧子　　麻野　遥		
調査参加者	佐伯　昌俊　　森川リユ子　　岩本　光子　　弘奥　長生		
	村上　里美　　久保　政幸　　大井　将正		

3．発掘調査に際しては、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただき、また　丹羽野氏からも一方ならぬお世話をいただいたことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

　また、発掘現場においては、所有者の岩本光子氏をはじめとし、地元の方々にご協力を得るなど、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4．今回の調査において、ピット（柱穴）－Ｐ、土構－ＳＫと略号している。なお、現場あるいは編集に利用した現地地図は、1／1000の縮尺のものであり、また、位置図などは1／25,000を使用した。なお、現地における基準点測量及び地形図は、株式会社ワールドの協力を得て行った。

5．調査に伴う記録類及び出土遺物は、津和野町教育委員会で保管している。

6．本書は宮田・永田・椋木・佐伯・麻野氏の協力のもと、中井將胤が編集にあたった。

目　次

第１章　発掘調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　発掘調査の経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1

第２章　地区の概況 …… 2
　第１節　地理的環境と地形的立地 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査概要 …… 8
　第１節　調査区の設定 …… 8
　第２節　層序と層位 …… 9
　　１．はじめに …… 9
　　２．層序状況 …… 9
　第３節　遺構 …… 10
　　１．はじめに …… 10
　　２．検出遺構 …… 10
　第４節　年代測定 …… 12

第４章　出土遺物 …… 16
　第１節　はじめに …… 16
　第２節　実測遺物 …… 16

第５章　小　　結 …… 17

挿図・図表目次

第１図　位置図 …… 1

第２図　地形断面図 …… 2

第３図　位置と周辺の遺跡分布 …… 4

第４図　陶晴賢本陣縄張図 …… 5

第５図　陶晴賢本陣跡全体測量図 …… 7

第６図　調査区配置図 …… 8

第７図　土層図 …… 9

第８図　遺構配置図 …… 11

第９図　ＳＫ０１・０２断面図 …… 11

第10図　遺物実測図 …… 16

第１表　検出遺構計測表 …… 10

第２表　出土遺物計測表 …… 16

図　版　目　次

図版１　１　調査地点鳥瞰

図版２　１　陶晴賢本陣跡近景（北から）
　　２　陶晴賢本陣跡から見た津和野城と城下町

図版３　１　調査前の状況（伐採前　北西から）
　　２　調査前の状況（伐採後　北西から）

図版４　１　Ａ調査区西壁　　２　Ａ調査区東壁
　　３　Ｂ調査区東壁

図版５　１　Ｐ０２検出状況（南から）　　２　Ｐ０２半掘状況（南から）
　　３　Ｐ０３半堀状況（南から）　　４　Ｐ０２、３完掘状況（南から）
　　５　Ｐ０５検出状況（南から）　　６　Ｐ０５完堀状況（南から）

図版６　１　Ｐ０６検出状況（南から）　　２　Ｐ０６完掘状況（南から）
　　３　Ｐ０７検出状況（南から）　　４　Ｐ０７完掘状況（南から）
　　５　Ｐ１１半堀状況（南から）　　６　Ｐ１１完堀状況（南から）

図版７　１　ＳＫ０１半掘状況（南から）
　　２　ＳＫ０１完掘状況（南から）

図版８　１　ＳＫ０２検出状況（東から）　　２　ＳＫ０２半掘状況（西南から）
　　３　ＳＫ０２完掘状況（南から）

図版９　１　発掘調査完掘状況（西から）
　　２　発掘調査完掘状況（東から）

図版10　１　出土遺物
　　２　実測風景

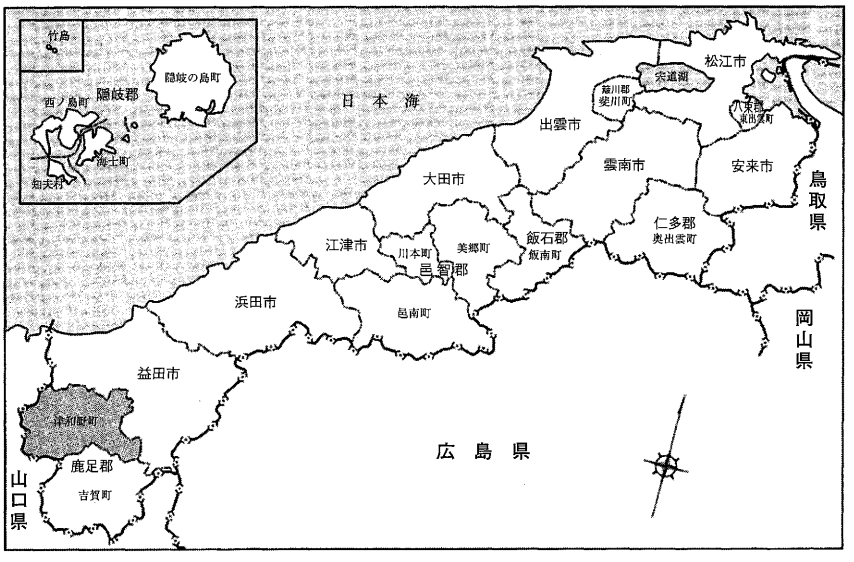
図版11　１　Ａ区発掘作業風景
　　２　Ｂ区発掘作業風景

第１章　発掘調査の経緯と経過

第１節　発掘調査の経緯

平成17年８月、㈱エヌ・ティ・ティドコモ中国より「津和野中座」基地局新設工事地内の埋蔵文化財の有無、及び取扱いについての協議が津和野町教育委員会になされた。
これに対し、今回の建設予定地は陶晴賢本陣の主郭の一部であることから、建設場所の変更を協議したが、既に変更計画は難しい状況にあり、携帯電話の利便性今日性も考えれば工事はやむを得ないものと判断した。

そして平成17年11月、津和野町教育委員会は、島根県文化財課の指導により、工事予定地内を工事着手前に発掘調査を行う必要がある旨を回答した。そして平成18年７月に依頼を受け、同年８月３日付で島根県教育委員会へ埋蔵文化財発掘調査通知を提出し、８月７日より現地調査を実施した。



第１図　位置図

第２節　発掘調査の経過

発掘調査を開始するにあたり、調査対象地が現在ヒノキ林になっているため、伐採作業終了後の平成18年８月17日、調査区を設定し発掘調査を開始した。

発掘調査の後半に差掛かった段階で、今後の調査方法等の指導を受けるため、島根県教育委員会文化財課の丹羽野氏に平成18年９月８日、来町してもらい現地での指導を受けた。また、同年９月22日には、梅光学院大学の渡辺教授、県文化財課の西尾氏、町文化財保護審議会の松島氏が来跡され、今後の調査方法や遺構などについての指導を受けた。そして、現地調査は平成18年９月29日に無事終了した。

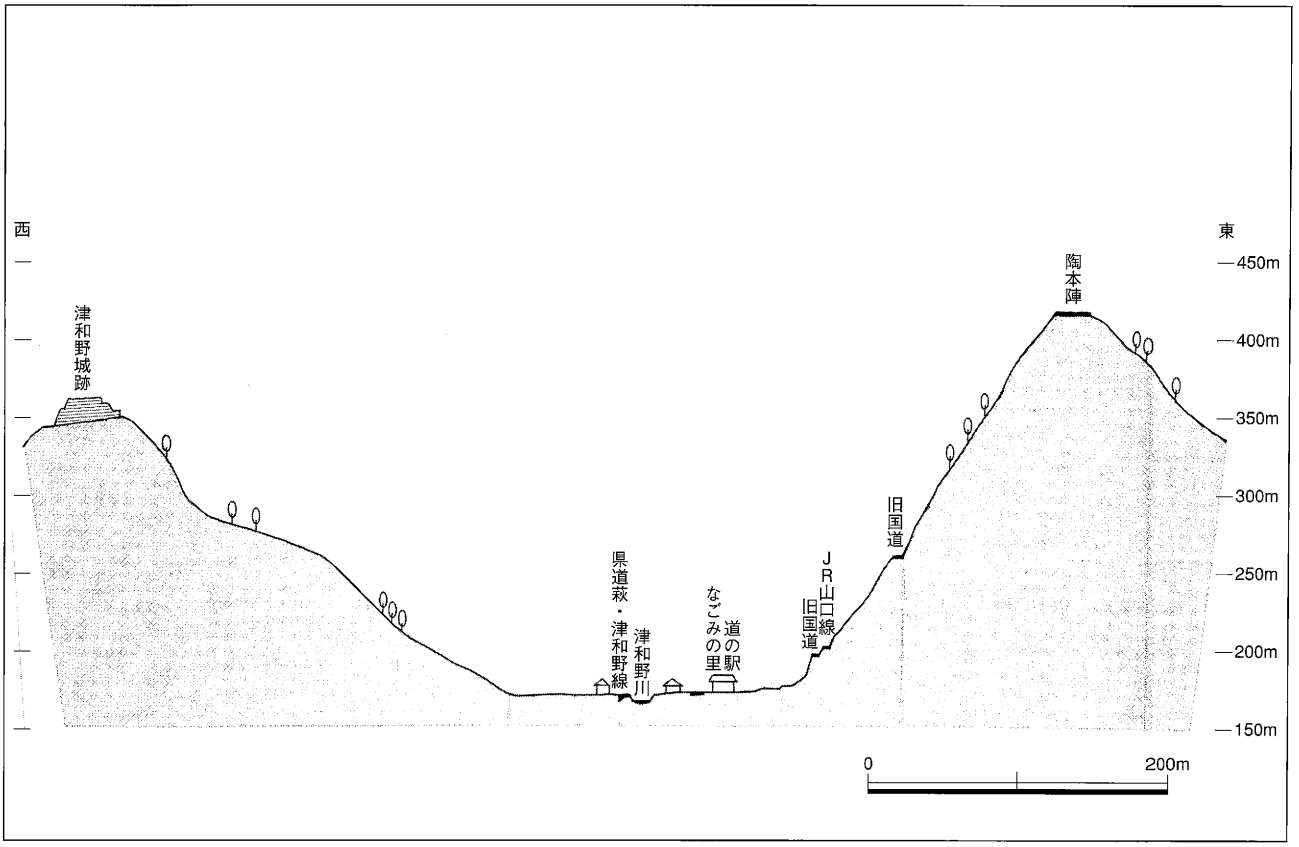
さらに、平成19年３月５日には、県文化財課の西尾氏に出土遺物の鑑定をしてもらった。

第２章　地区の概況

第１節　地理的環境と地形的立地

本遺跡が所在する津和野町は、島根県西部に位置（第１図）し、平成17年９月25日に合併が行われたため、現在では北・東側が益田市、南側が吉賀町、西側が山口県に接した位置に存在する。そして、東西27ｋｍ、南北19ｋｍ、を測り、総面積307.09ｋｍとなる。また、総面積の約８割以上が山林で、高津川や津和野川の流域とその支流が入り込み、流域に市街地、集落、農地が点在し、まさに典型的な中山間地域である。

陶晴賢本陣跡は、島根県津和野町中座1680−2番地に所在し、本町の南東部にあたる山口県との県境に位置する。該当地は西から北東方向に流下する津和野川の右岸にあり、標高約420m、比高約220mを測る位置に立地している（第２図）。また、正面北側には津和野川を隔てて津和野城がある。そして、津和野川をはじめとする河川沿いに200～300mの平野部が城下町を含めて広がり、400m級の山々、さらに900m級の山々がそびえて周囲を囲む形で盆地状の地形を形成している。



第２図　地形断面図

第２節　歴史的環境

本地区における遺跡等は、津和野川両側において多く点在している（第３図）。津和野川付近は高田盆地であり、古い時代として高田遺跡や山崎遺跡からは、縄文時代早期の土器が出土している。それ以降の時代においても、本調査地の麓である大蔭遺跡は縄文後期から奈良・平安時代までの遺跡であり、中世以降の遺跡も点在する。そして北側には津和野城があり、その東側麓には城下町がある。

中世時代の津和野の領主である吉見氏は、弘安５(1282)年に元寇再防備のため能登国から津和野北部の木部地区に入り、その後14世紀に津和野城を構えたと伝えられている。中世の津和野城の大手口は近世以降の大手口とは反対側の喜時雨にあったと考えられ、吉見氏の居館なども城の西側に存在していたとするのが通説である。

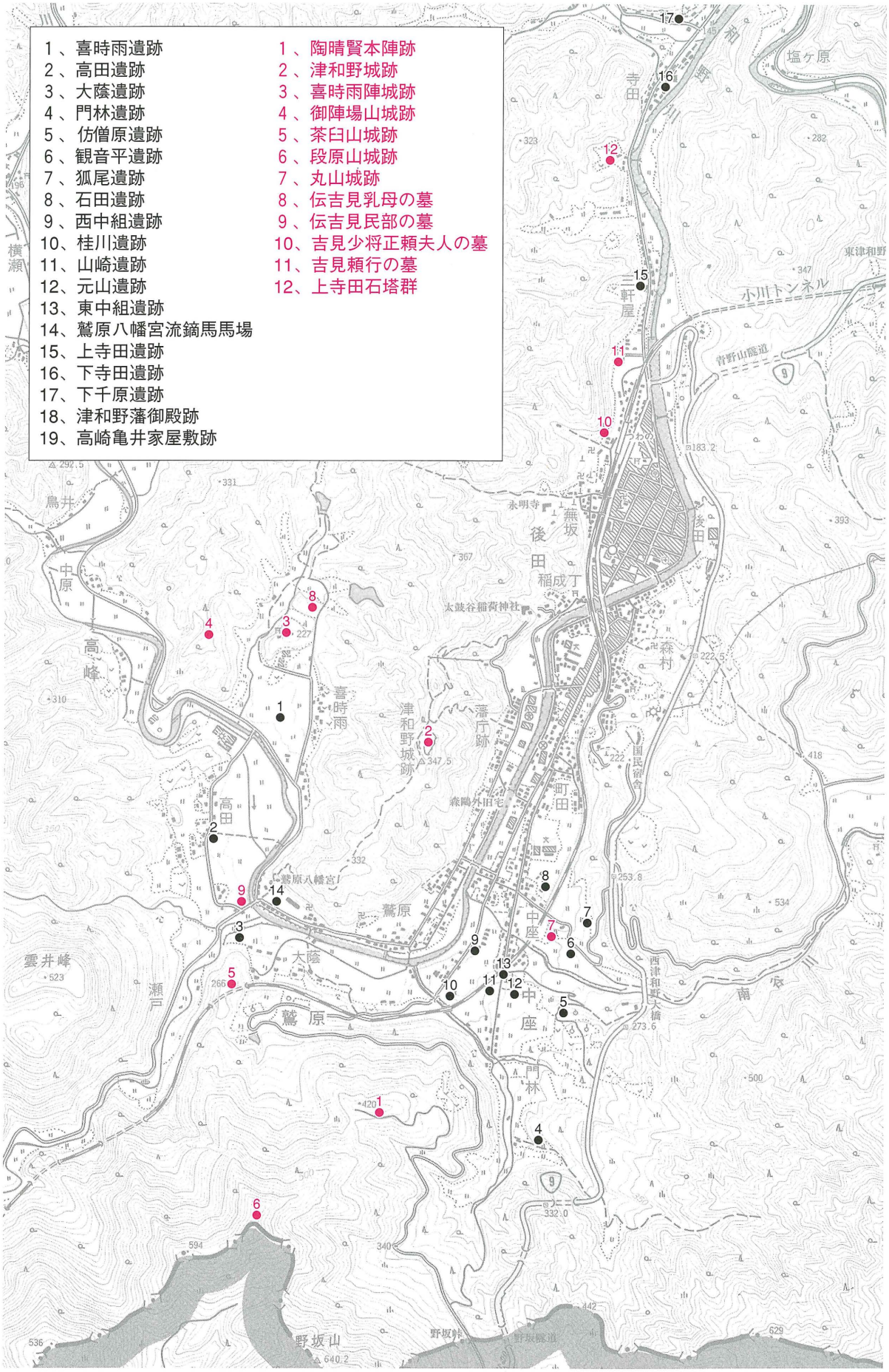
本陣を構えた陶晴賢は天文20(1551)年、主君である大内義隆を自害に追い込んだあと、益田氏と共に、吉見氏を挟み撃ちにしようとした。そのため領主であった吉見正頼は、主君でありまた義弟であった大内義隆の弔いのため、天文22(1553)年、陶晴賢討伐を宣言し、戦が始まったのである。討伐宣言後、陶晴賢は幾度となく吉見氏と激戦を繰り広げていたものの吉見氏を滅ぼすことはできず、天文23(1554)年３月この地に陣を構えたのであった（第４図・第５図）。そして12回の激戦の末、４月17日頃から戦況が変化し、ついに吉見正頼は津和野城の尾根沿いにある下瀬山城に後退することとなったのである。

陶軍は８月２日に全面攻撃をかけ、多くの死傷者を出す接近戦を繰り広げたが、それでも毛利氏と連携をとっていた吉見氏は最後まで抵抗を続け、９月に入り尼子氏調停のもと正式に和解し、１年もの長期に亘る戦が終わったのである。

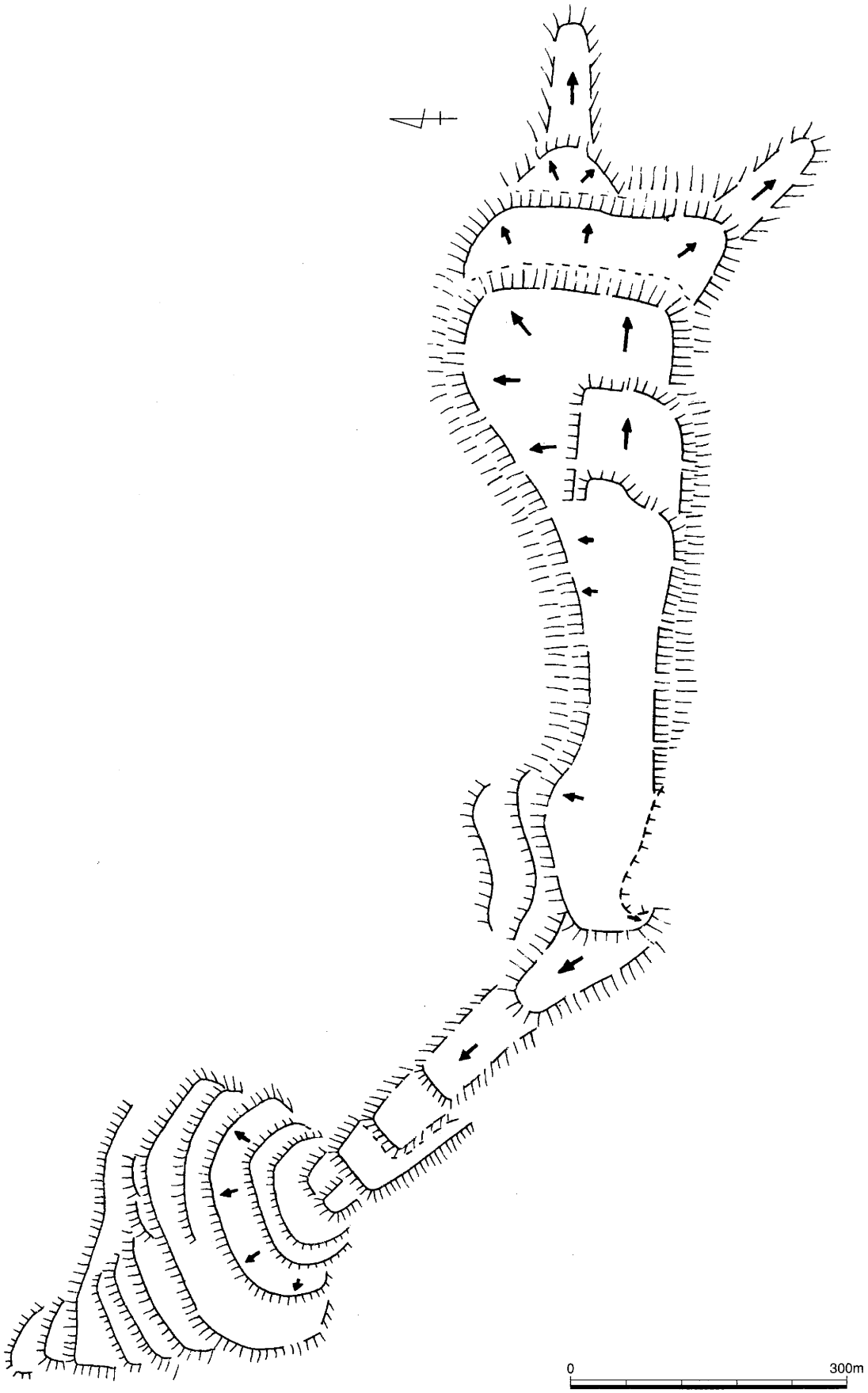
（津和野郷土館蔵）

大正10年山口線建設工事中に栃ケ獄（陶晴賢本陣跡）の中腹の傾斜地から出土した。「鹿玉山」「龍文寺」の銘があり徳山市の龍文寺の茶釜であることが確認された。

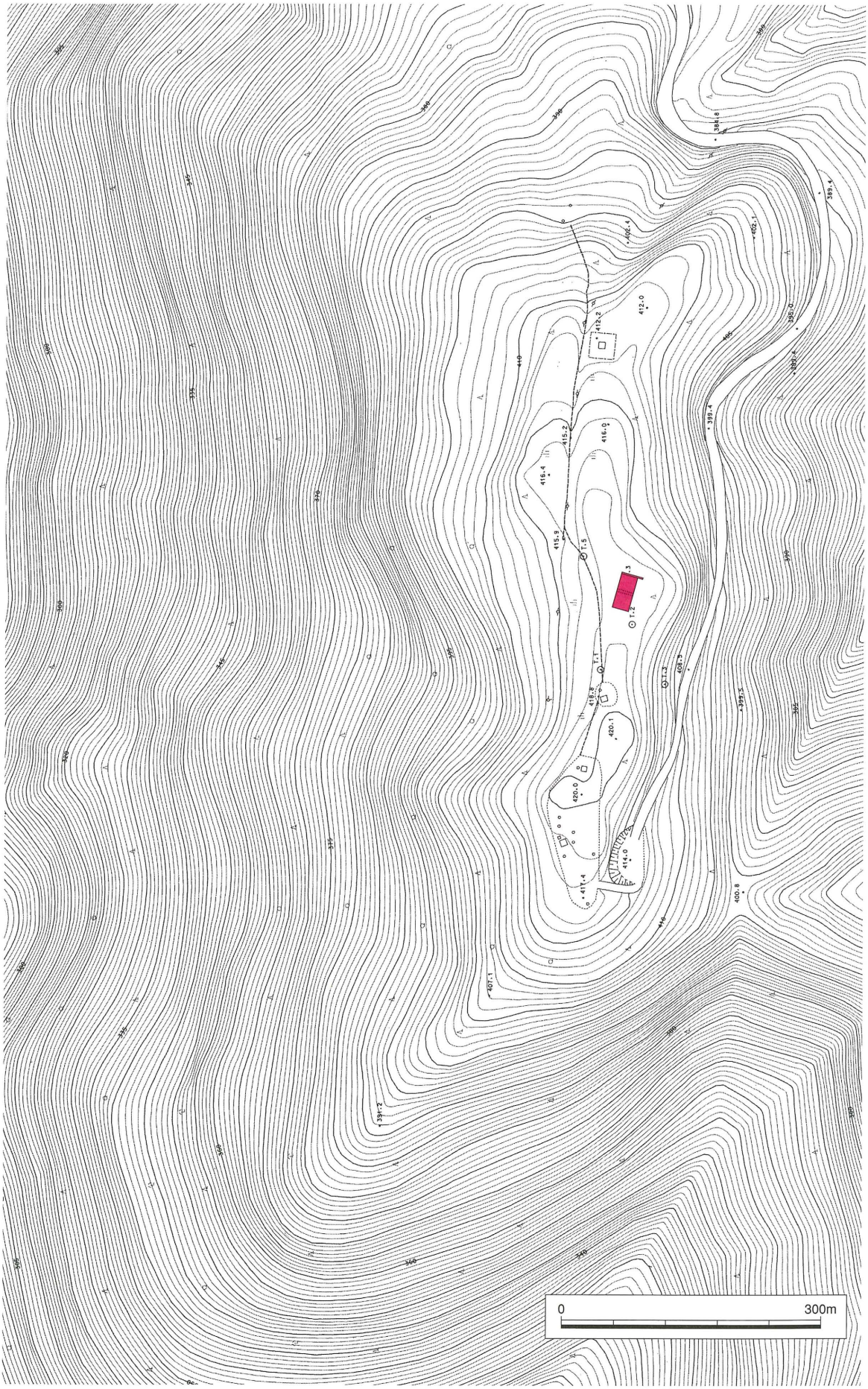
（津和野町史第1巻）



第３図　位置と周辺の遺跡分布



第４図　陶晴賢本陣縄張図



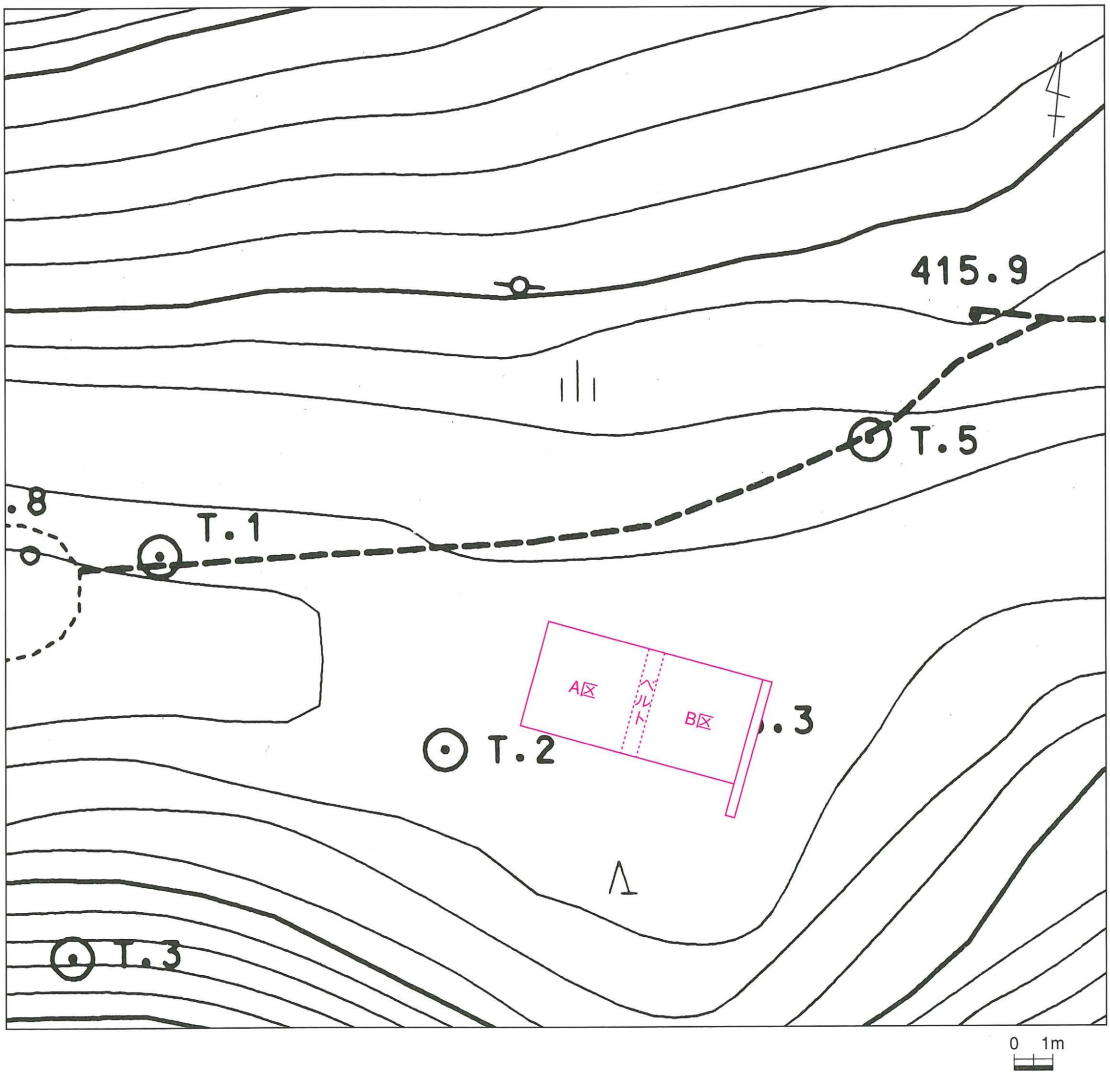
第５図　陶晴賢本陣跡全体測量図

第３章　調査概要

第１節　調査区の設定

今回の開発予定地は約200㎡であり、その内、鉄塔や付随施設等の建設予定地は約100㎡になるため、今回の発掘調査範囲は、掘削した廃土の置き場も考えて、鉄塔等の建設予定地を中心に範囲を設定することにした。まず、南北に７ｍ、東西に７ｍ合計49㎡の正方形に設定し、東側に１ｍ幅のベルトを設け、さらに東側に同形の調査区を設定した。そして、西側をＡ区、東側をＢ区とし、調査面積は、ベルト部分を含めて合計105㎡を測る（第６図）。

最終的に、Ａ、Ｂの調査区の間にあるベルトは掘削し、堆積状態を確認するためＢ区東側に幅70cmのトレンチを設定した。



第６図　調査区配置図

第２節　層序と層位

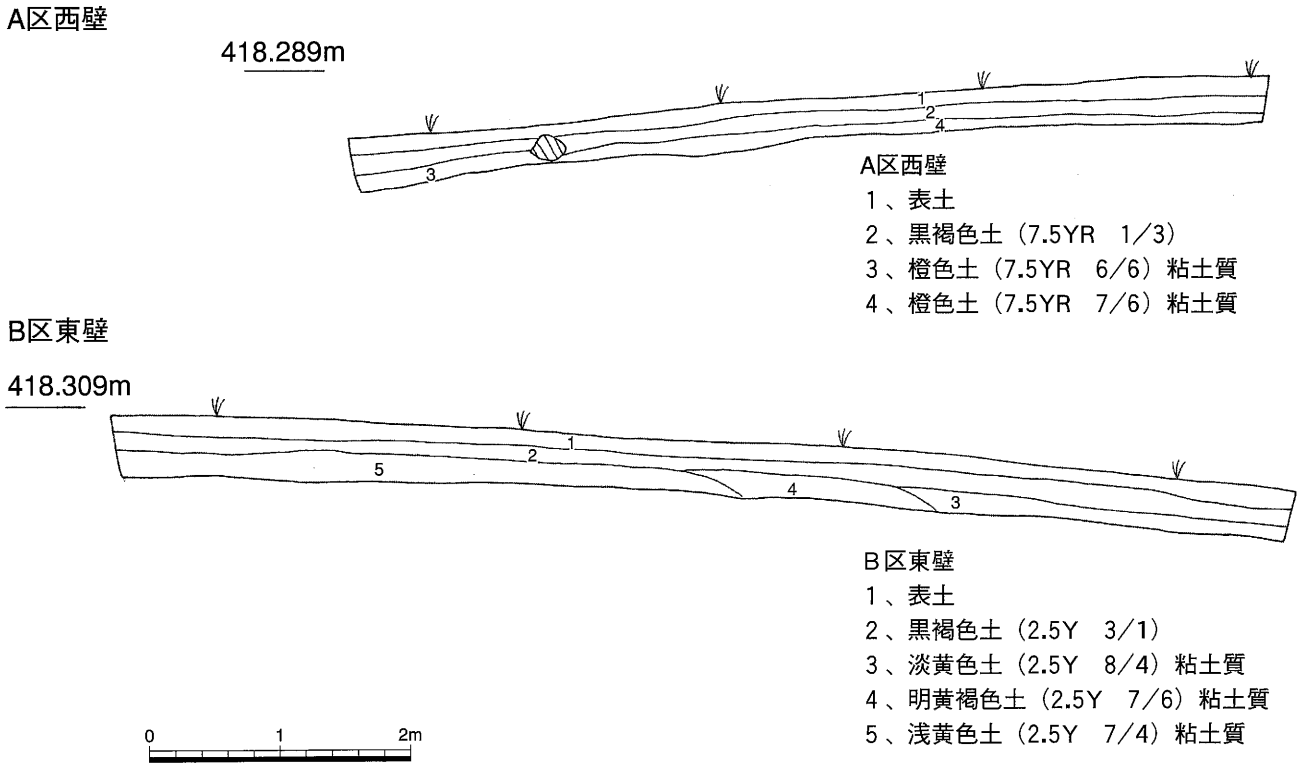
１．はじめに

本節で記している土層の色彩は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人　日本色彩研究所が監修している、小山正忠・竹原秀雄　著『新版　標準土色帖　2004年版』を使用している。

２．層序状況

本遺跡の西側の基本層序は、１層の表土、２層は黒褐色土（7.5ＹＲ1／3）、３層は橙色粘質土（7.5ＹＲ6／6）、４層は橙色粘質土（7.5ＹＲ7／6）であった。東側では、１層の表土、２層は黒褐色土（7.5ＹＲ1／3）、３層は浅黄色粘質土（2.5ＹＲ7／4）、４層は明黄褐色粘質土（2.5ＹＲ7／6）、５層の淡黄色粘質土（2.5ＹＲ8／4）であった（第７図）。

以上の層序を考察すると、西側の４層と東側の５層は地山であり、西側の３層と東側の3､4層は調査区北側の尾根部を削平し、その地山の土を南側の傾斜地に盛土し、平坦部を作ったものと考えられた。



第７図　土層図

第３節　遺　構

１．はじめに

本節で述べる遺構については、柱穴状のものをＰ、土構をＳＫと略号した（第８図）。

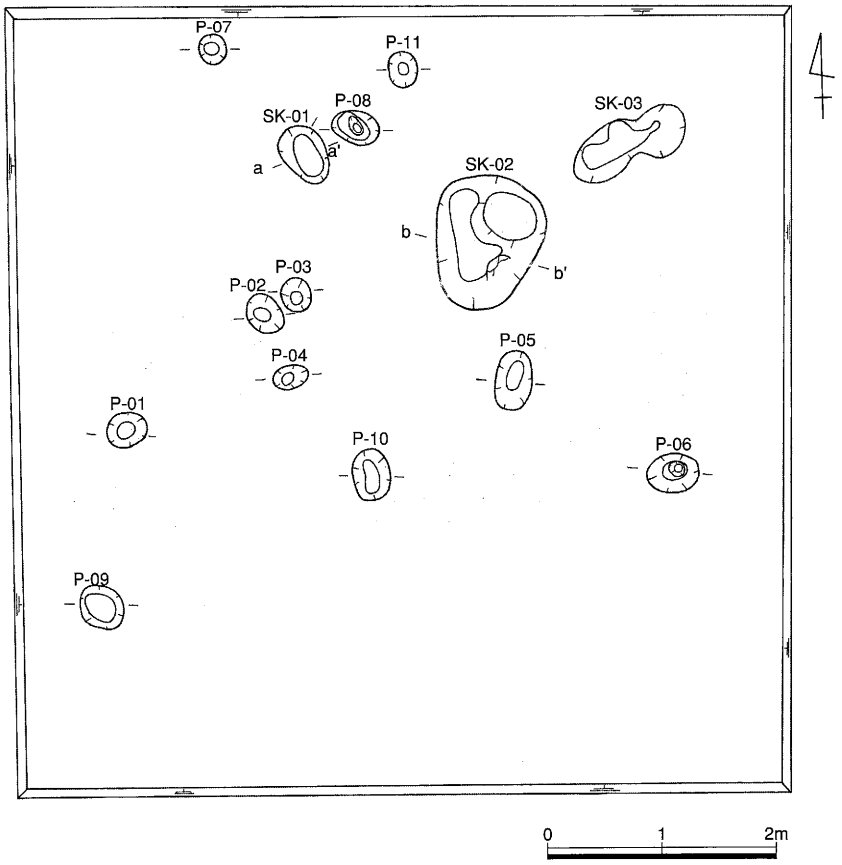
２．検出遺構

ピット状（Ｐ）と称した遺構は、11個が検出され、その多くはＡ区北側に集中していた。これらのピットは、直径約30cm～40cm、深さ約10cm～20cmを測る。いずれも小さな柱穴であり、大きな建物が建っていたとは考えられず、柱穴間の関連も調査区内だけでは判明することは困難であった。また、柱穴遺構は北側の調査区外に続くものと思われた。

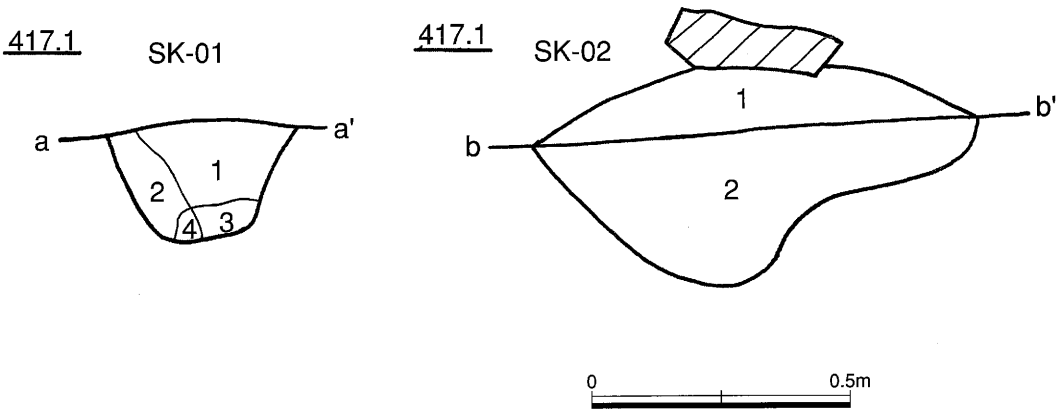
ＳＫと称した遺構は、３箇所検出された（第９図）。まずＳＫ01は、37cm×60cmの方形、深さ24cmを測る。この遺構は炭化物を含んだ土坑であるが用途・目的については不明であり、炭化物については自然科学分析の結果、1200年から13000年前との判定がでている。その結果については次節で詳細に述べる。次にＳＫ02は、86cm×115cmで深さ35cmを測る。用途・目的については不明であるが地山を人為的に掘られたもので、土師質土器片が１片出土している。出土遺物から判断して、この遺構は中世期のものであると考えられた。

ピット	上面(標高)	下面(標高)	深さ(cm)	直径(cm)	備考
Ｐ01	416.786	416.68	約10	約35	
Ｐ02	416.874	416.685	約18	約32	
Ｐ03	416.886	416.782	約10	約27	
Ｐ04	416.833	416.731	約10	約34	
Ｐ05	416.891	416.765	約12	約32	
Ｐ06	416.939	416.768	約17	約46	
Ｐ07	416.972	416.856	約11	約25	
Ｐ08	416.945	416.776	約16	約42	
Ｐ09	416.58	416.488	約9	約38	
Ｐ10	416.75	416.649	約10	約34	
Ｐ11	416.959	416.811	約14	約26	
ＳＫ01	416.96	416.72	約24	約37	炭化物出土
ＳＫ02	417.052	416.632	約35	約86	土師器出土

第１表　検出遺構計測表



第８図　遺構配置図



ＳＫ－０１
１、明黄褐色土（2.5Y　6/6）
２、明黄褐色土（2.5Y　7/6）
３、にぶい黄色土（2.5Y　6/4）
４、生物痕

ＳＫ－０２
１、黒褐色土（2.5Y　7/4）
２、オリーブ褐色土（2.5Y　4/4）

第９図　ＳＫ01・02断面図

第4節　年代測定

1　分析試料について

1－1 試料採取地点

図1－1に試料採取地点を示す。平面図は、津和野町教育委員会より提供を受けた原図をもとに作成した。

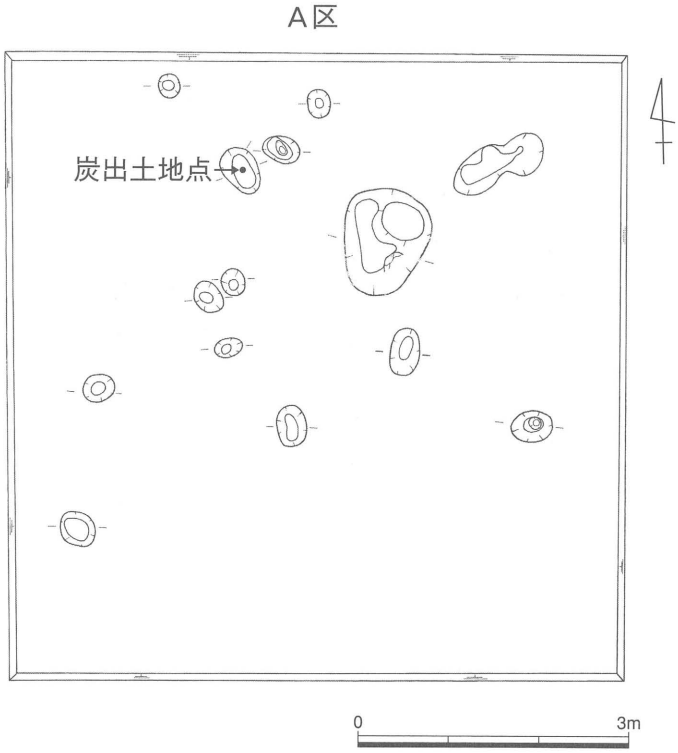


図 1－1 試料採取地点

1－2 年代測定試料

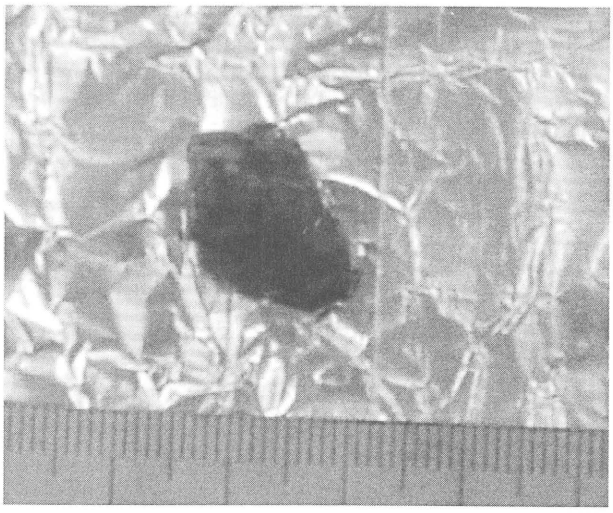


図 1－2 年代測定試料(TT-1)

試料の概要

試料名：TT-1

重量：0.419g

試料の種類：炭

2 AMS年代測定方法

(1) 原理

大気圏上層で熱中性子化した宇宙線が、窒素原子と原子核反応（$^{14}N^{+n} \rightarrow {}^{14}C + H$）を起こして放射性炭素（$^{14}C$）が生成される。この放射性炭素（$^{14}C$）は、$CO_2$として炭素リザーバー（大気1.6%、腐植2.6%、生物圏0.8%、浅海2.0%、深海93%）に貯蔵され、一方では5568（5730）年の半減期でβ^-壊変をおこす。光合成等の生命活動を通じて生物体に固定される

^{14}Cの初期量は、それぞれの生命活動の行われたリザーバーにおける^{14}Cの平衡状態における量と同じと考えられ、生物体の死滅とともに、閉じた系の中で減衰していくと考えらえる。つまり、生物遺体中の^{14}C濃度を測定し、現在の^{14}C濃度とくらべることにより、その生物が死んでから現在（ただし、1950年を現在とみなす）までの経過年数がわかる。

(2) 前処理及び測定方法

1) 前処理

塩酸による酸洗浄（試料により、水酸化ナトリウムによるアルカリ処理）。

2) 試料の調整

酸化銅とともに加熱し、二酸化炭素を生成。

精製ラインにおいて水、二酸化硫黄などの不純物を除去。

精製した二酸化炭素を水素と鉄とともに加熱し、グラファイトに調整。

アルミ製ターゲットホルダーにプレス圧入

3) 測定

ＡＭＳ（加速器質量分析）法による。

タンデム型イオン加速器を用い^{14}C濃度を測定する。

4) 年代計算

年代計算を行う際には、^{14}Cの半減期を5568年として行う。

5) 補正計算

$\delta^{13}C$を測定・算出し、4)で得られた年代値を補正する。

6) 暦年代較正

OxCal ver3.1 を用い、INTCAL04データを利用して算出する。

3 AMS年代測定結果

測定結果を表3－1に示す。

表3－1には、測定年代、補正^{14}C、暦年較正用年代、暦年代の４種類の年代値を示してある。

測定年代は，従来は実年代として用いられてきた値である。^{14}C濃度が環境，時代にかかわらず常に一定であるという仮定の下に，リビーの半減期（5568年）を用いて計算した値である。

補正δ^{13}Cは、後記暦年較正用年代の、1の位を「0」、「5」で丸めたものである。

暦年較正用年代は、^{14}C濃度が環境により変動することから，δ^{13}Cを測定し，δ^{13}C＝-25‰に規格化した^{14}C濃度を求め，年代値を算出したものである。

上記の年代は，いずれも西暦1950年からさかのぼった年代値で示してある。

一方暦年代は，時代（時間）とともにランダムに変化している大気中二酸化炭素の^{14}C濃度を，樹木の年輪や海底堆積物の縞（しま）状粘土，サンゴの年輪から明らかにして得られた暦年代較正データ（INTCAL04）を用いて、暦年較正用年代を較正したものである。

表 3－1 年代測定結果

試料 No.	測定年代 (yrBP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C (yrBP)	暦年較正用年代 (yrBP)	暦年代*1 (cal y.)	測定番号 (PLD-)
TT-1	1260±20	-25.82±0.13	1245±20	1245±19	AD680－830 AD840－870	6360

*1:2 sigma,95%probability

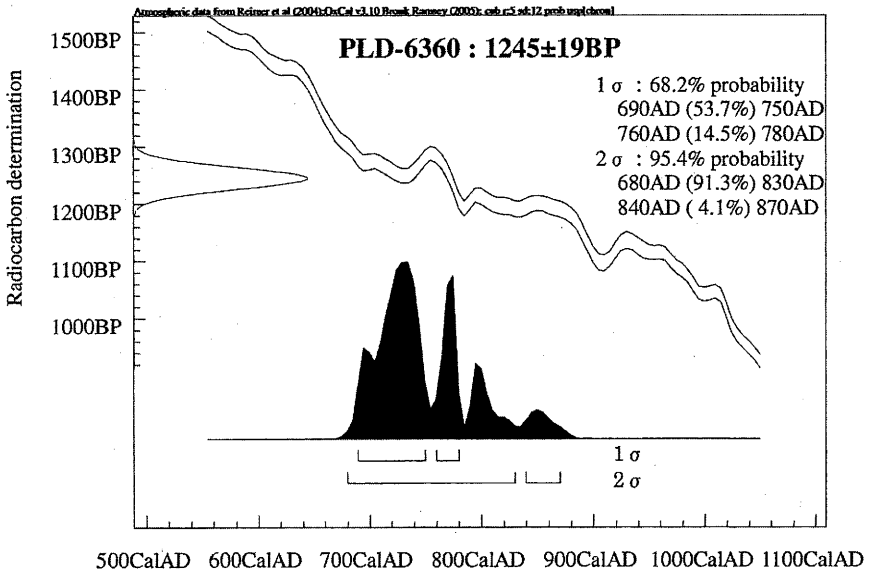


図 3－1 暦年較正結果

4　得られた年代値について

調査地点は、天文23年(1554年）の三本松城（津和野城）を中心とした攻防戦の際に、陶晴賢が本陣を置いたとされる場所であった。このことから、年代測定を行った炭片が採取された遺構は、陶晴賢の本陣に由来するものと考えられていた。

今回得られた年代はAD680～870年（飛鳥～平安時代前期）であり、予想された年代と大きく離れるものであった。通常、樹木を用いた年代測定値は遺構の年代より古くなる傾向にある。これは、樹木の成長に関係現象と考えられるが、700～900年という値は、樹木の成長に伴う誤差とするには離れすぎた値である。したがって得られた年代値からは、今回の遺構が天文23年(1554年）の陶晴賢本陣に関係したものであった可能性は極めて低いと言える。

5　まとめ

天文23年(1554年）の陶晴賢本陣跡に関したと考えられる遺構内埋土中の炭片を対象に、AMS年代測定を実施した。しかし、得られた年代値はAD680～870年（飛鳥～平安時代前期）であり、予想された年代と大きく離れるものであった。このことから、この遺構が陶晴賢本陣跡と関係した可能性は、極めて低いと言える。

文化財コンサルタント㈱　渡邊正巳氏

第４章　出土遺物

第１節　はじめに

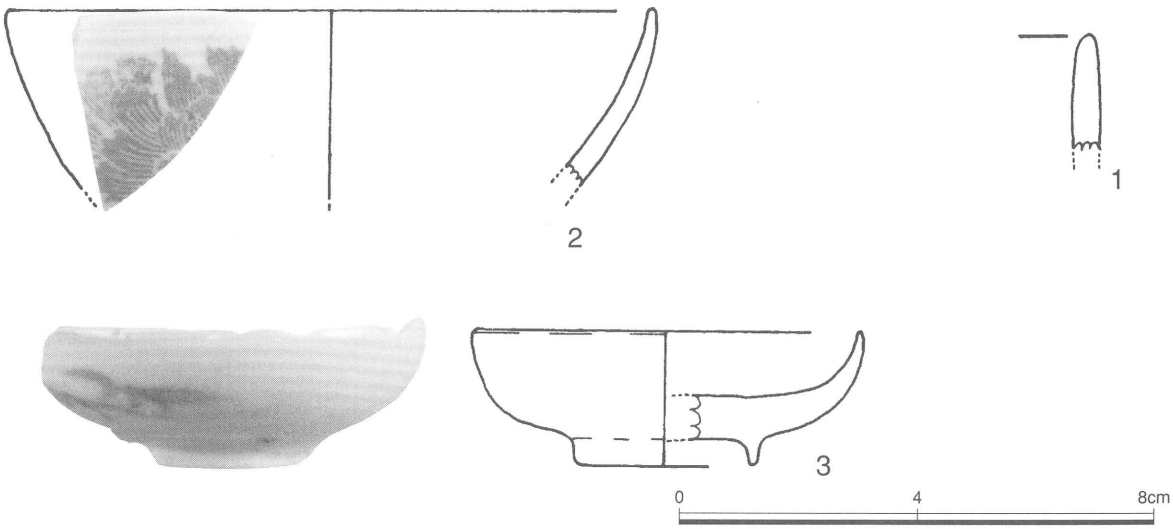
本調査においての出土遺物は、土師質土器類１点、陶磁器類１点の総数２点であった。また、調査区外の表面採取にて陶磁器片が１点確認された。また、実測を行った出土遺物の内訳は、出土遺物集計表（第２表）に示しているとおりである。なお、次節において実測遺物を種類別に詳細に記述していくことにする（第10図・図版10-1）。

番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
			口径	底径	器高				
1	SK―02	土師質 不明					（外内）にぶい黄橙色	（胎）2mm以下の 砂粒を含む	体部の片 16世紀頃
2	A区	磁器 小碗	10			（外）植物文様	胎:灰白色 文様:金色	（胎）密 （焼）良好	口縁～体部の片 明治頃
3	表採	磁器 極小皿	5.8	2.8	高台径 2.5	古伊万里焼	胎:灰白色 文様:藍色	（胎）密 （焼）良好	口縁～底部の片 17世紀前半

第２表　出土遺物計測表

第２節　実測遺物

１は、ＳＫ－02から出土した土師質土器である。小片のため確かなことは分からないが、おそらく中世期のものと思われる。２は、Ａ区１層からした小碗で直径約11センチ、年代は明治期のものと推定される。３は、直径6.5センチの極小皿で江戸初期の古伊万里と思われる。



第10図　遺物実測図

第5章　小　　結

今回調査を実施した地点は、陶晴賢本陣跡として築かれた山城の一部分である。しかも、開発事業に伴う緊急の調査であったため、調査日数、調査面積とも制限された状況であり、城全体のわずか数％が調査対象であった。

その成果からでは、城の全貌を明らかにすることは困難であった。しかし、今回の調査区周辺は、現在の地形や土層などから考察して、尾根を削平して平坦地を作ったものであることは確認できた。また、用途は不明ではあるが、当時の土師質土器を伴った土坑や柱穴状遺構なども検出された。

また、遺物などが少量しか出土しなかったことや検出遺構が少なかったことは、城として使用された期間が僅か5ケ月であったことと関係があるのではないかと考えられた。また、想像の域は越えないが、本山城の立地などから考えて、おそらく吉見氏の動きを監視する場所だったのではないかと思われた。

今回の調査成果は、今後、本調査区周辺や近隣の山城などの調査をする上で貴重な資料になると考える。

参考文献

沖本常吉編『津和野町史』第一巻　　津和野町史刊行会　1970

沖本　博著『吉見氏とその時代』　津和野歴史シリーズ刊行会　1997

『津和野城跡基本構想策定報告書』　津和野町教育委員会　2003

引用

第4図　陶晴賢本陣縄張図は、『石見の城館跡』島根県中近世城館跡分布調査報告書〈第1集〉4主要城館跡の解説・略測図より転載

図版 1

1　調査地点鳥瞰

図版２

１　陶晴賢本陣跡近景（北から）

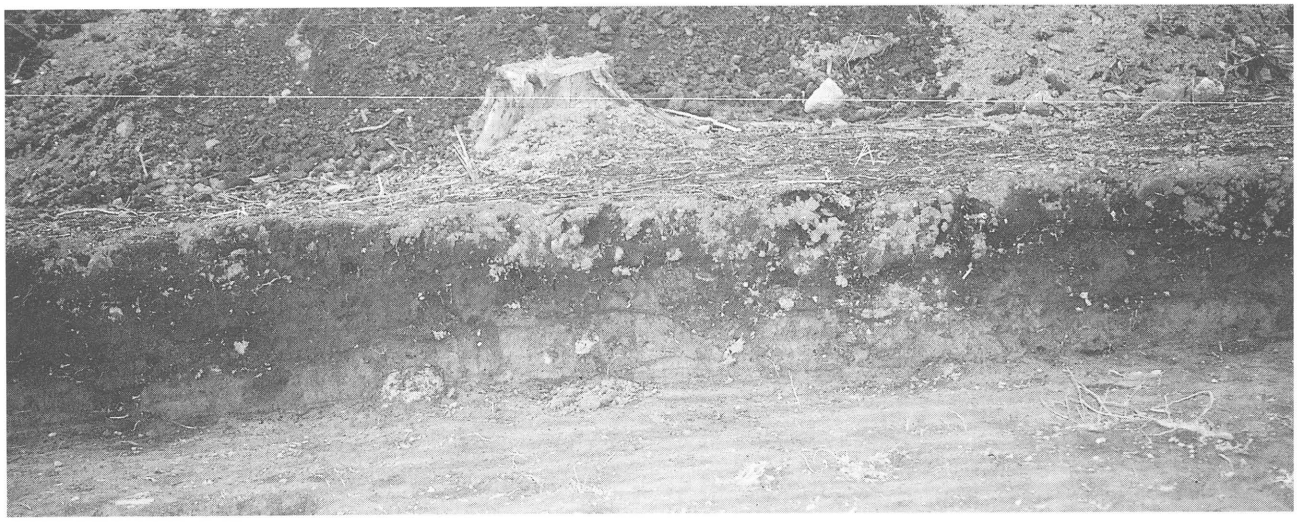
２　陶晴賢本陣跡から見た津和野城と城下町

図版３

１　調査前の状況（伐採前　北西から）

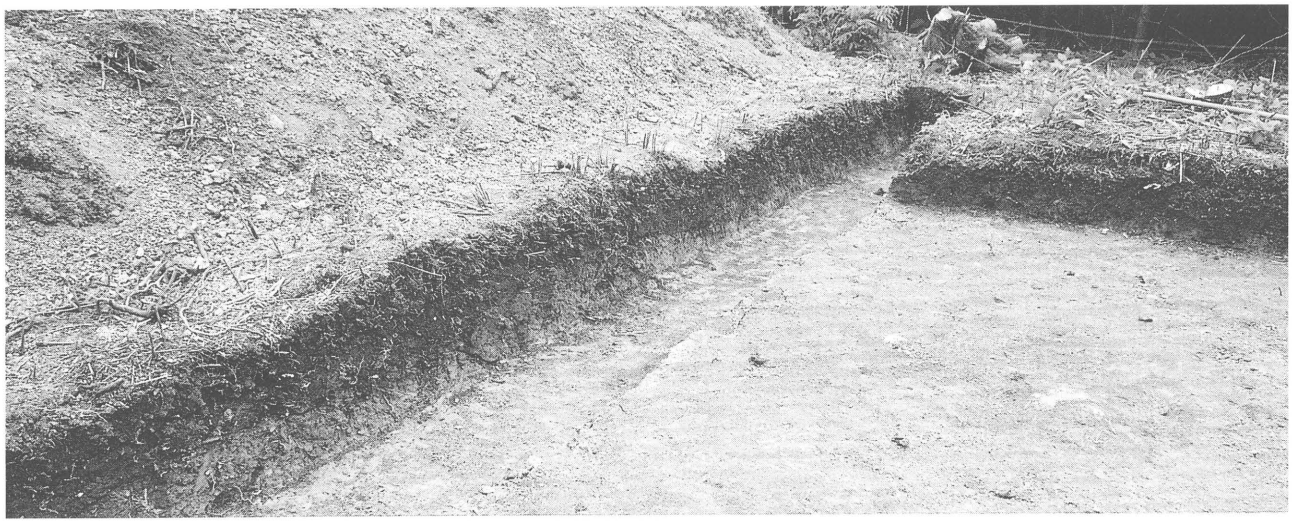
２　調査前の状況（伐採後　北西から）

図版 4



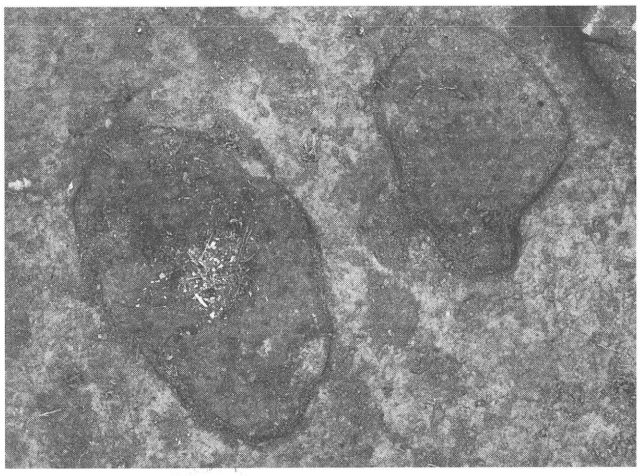
1　A調査区西壁

2　A調査区東壁



3　B調査区東壁

図版５

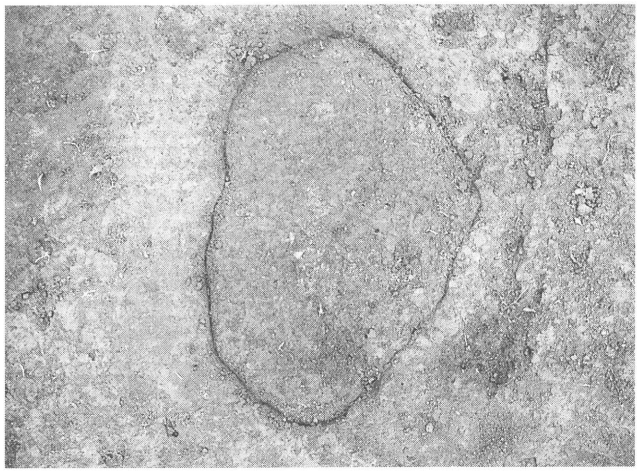


１　Ｐ０２・０３検出状況（南から）

２　Ｐ０２半掘状況（南から）

３　Ｐ０３半掘状況（南から）

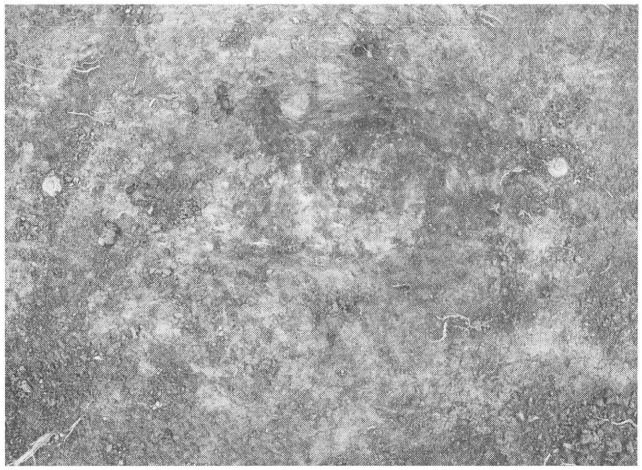
４　０３完掘状況（南から）



５　Ｐ０５検出状況（南から）

６　Ｐ０５完掘状況（南から）

１　Ｐ０６検出状況（南から）



２　Ｐ０６完掘状況（南から）

３　Ｐ０７検出状況（南から）

４　Ｐ０７完掘状況（南から）

５　Ｐ１１半掘状況（南から）

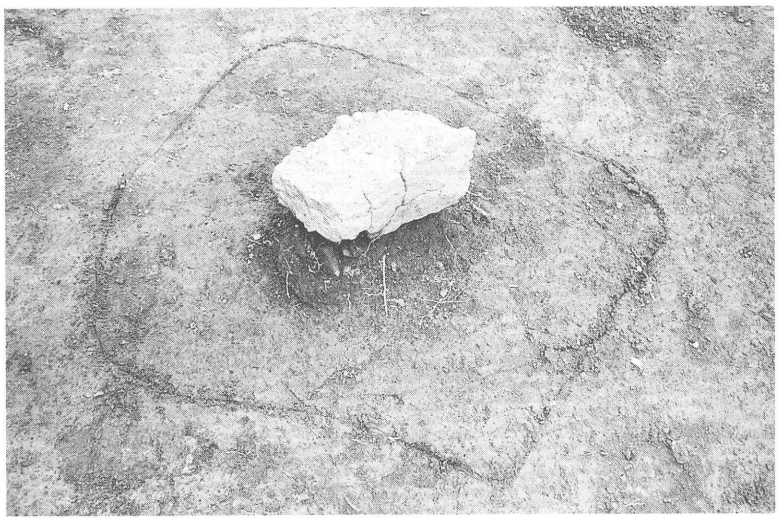
６　Ｐ１１完掘状況（南から）

図版７

１　SK０１半掘状況（南から）

２　SK０１完掘状況（西から）

図版８



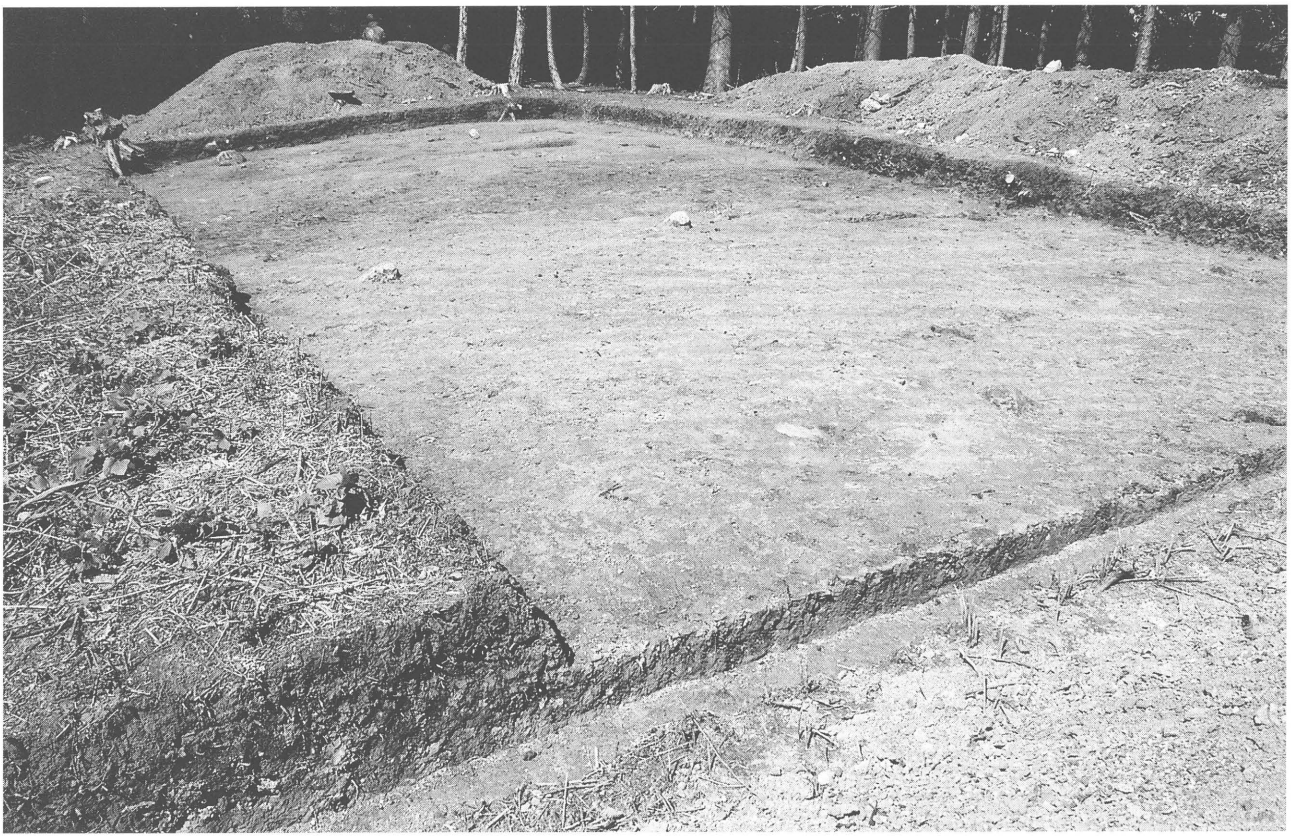
1　SK０２検出状況（東から）

2　SK０２半掘状況（西南から）

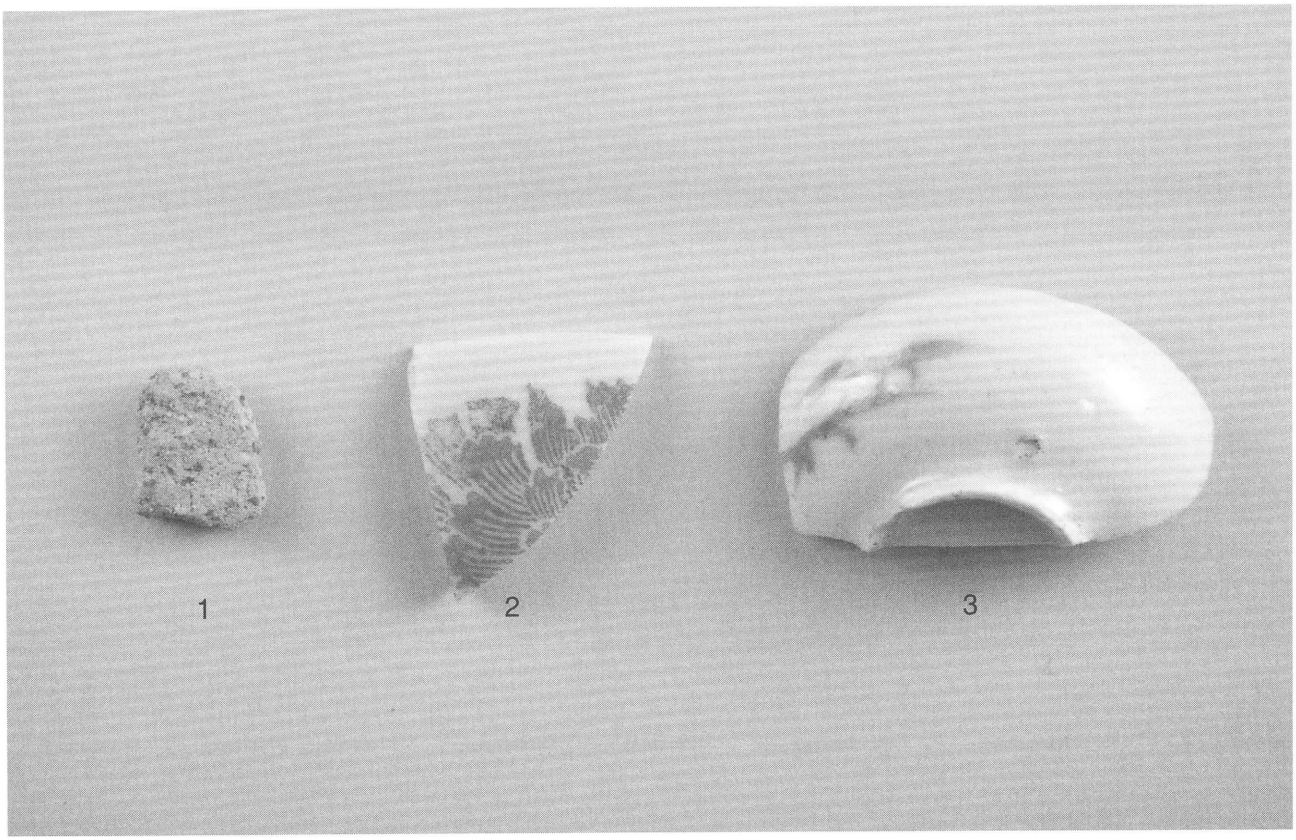
3　SK０２完掘状況（南から）

図版 9

1　発掘調査完掘状況（西から）



2　発掘完掘状況（南東から）



1　出土遺物

2　実測風景

図版11

1　A区発掘作業風景

2　B区発掘作業風景

報　告　書　抄　録

ふりがな	すえはるかたほんじんあと
書名	陶晴賢本陣跡
副書名	ＮＴＴドコモ「津和野中座」基地局新設工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	津和野町埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第４集
編著者名	中井将胤
編集機関	津和野町教育委員会
所在地	〒699-5695　島根県鹿足郡津和野町後田ロ 64－6　℡ 0856－72－1854
発行年月日	2007（平成 19）年 3 月 20 日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
陶晴賢本陣跡（すえはるかたほんじんあと）	島根県（しまねけん）鹿足郡（かのあしぐん）津和野町（つわのちょう）中座（なかざ）	W	４９	34 度 26 分 42 秒	131 度 45 分 41 秒	20060817 ～ 20060929	１０５	ＮＴＴドコモ基地局工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
陶晴賢本陣跡（すえはるかたほんじんあと）	城　郭	中世後半	柱穴　土坑	陶磁器 土師質土器 炭化物	遺物は少量

要　約	・山城築城時の尾根部を削平し平坦部を作った痕跡が確認された。 ・中世期の土師質土器を伴った遺構が検出された。 ・柱穴状遺構が検出された。

津和野町埋蔵文化財報告書　第4集
陶晴賢本陣跡
平成19年３月
発　行　島根県津和野町教育委員会
印　刷　大村印刷株式会社
防府市西仁井令一丁目21番55号
TEL（0835）22-2555